

## Contents

第1回「地質の日（5月10日）」行事が全国で行われる

CCOP 第51回管理理事会報告

CCOP 第51回管理理事会巡検に参加して

特別講演会「鉱物の楽しみ」の開催

地質調査総合センター第12回シンポジウム「地下水と岩石物性との関連の解明～産総研のチャレンジ～」報告

平成20年度文部科学大臣表彰 創意工夫功労者賞を受賞 - 火山体の地殻変動観測システムに係る改良 -

新人紹介

スケジュール

編集後記

## 第1回「地質の日（5月10日）」行事が全国で行われる

「地質の日」事業推進委員会事務局 齋藤 眞（地質情報研究部門）

5月10日を「地質の日」の第一候補とする案が決められたのは、2006年11月7日のGSJ連絡会議でした（下川浩一, GSJ Newsletter 2007年1月号）。その後、2007年3月13日に産総研丸の内サイトにて、関係する10の学会・機関が集まって「地質の日」提唱共同発起人会を開き、議論の末に「地質の日」を5月10日と決め、第1回の事業を2008年から行うことにしました。

それを受けて関係する14の学会・機関（現在は16に増えている）は、2007年8月22日に臨海副都心センターで、第1回「地質の日」事業推進委員会を開き、委員長に中尾征三氏（東京地学協会、元GSJ、元文部科学省）、副委員長に栗本史雄地質調査情報センター長（当時）、神奈川県立生命の星・地球博物館の平田大二企画普及課長を選出しました。そして、それぞれの組織・機関が対等の関係で、自主的にできることを分担し、全国の博物館等を核に行う「地質の日」事業をもり立てていくという方針が決まりました。事務局は便宜的にGSJに置くことになりました。私事ですが2000年3月に湯浅真人地質調査所産学官連携推進センター長（当時）が「地質」の記念日を提唱した時に部下でしたので、職務として事業推進委員会の事務局を担当することは、感慨深いものがありました。

事業推進委員会ができた後、メールベースでコンセプトの文章の作製・ポスターデータの作製（デザイン：地質調査企画室 志摩あかね氏）、「地質の日」



### 2008年 中国・四川省地震速報

産総研地質調査総合センターでは、地質調査情報センター企画室に「対応事務局」を設置し、関連研究情報の一元的な発信体制を整えました。

詳しくは [http://www.gsj.jp/jishin/china\\_080512/index.html](http://www.gsj.jp/jishin/china_080512/index.html) をご覧ください。



写真1 4月14日から5月12日までの間、経済産業省本館ロビーで行われた展示

の登録（日本地質学会が資金・事務担当）、ポスターの印刷・送付（GSJを中心に9学会・機関が資金提供）と事業は進みました。年が明けて2008年になると、国立科学博物館と全国科学博物館協会が事業推進委員会に参加し、全国科学博物館協会を通して各博物館に事業への参加を呼びかけると共に、文部科学省生涯学習制作局社会教育課より各都道府県教育委員会宛に「地質の日」の事業に参加するよう依頼文も出していました。この依頼文の効果は大きく、多くの博物館が参加できるようになりました。その後事務局は、月刊「測量」をはじめとする学協会誌等に紹介・宣伝をしてきました。この結果、4月中旬より35を越える博物館等で、さまざまな「地質の日」関連事業が行われることとなり、初回事業として十分な盛り上がりを見せました。

GSJでは、経済産業省の本館ロビーでのシームレス地質図等の展示（4/14～5/12、写真1）、つくばフェスティバル出展（5/10～11）、本館ロビーで行った「つくばの地質」展示・説明会（茨城県地質調査業協会協賛）と「地質の日」の由来となった「日本蝦夷地質要略之図」の展示（5/10）、地質標本館の「黄鉄鉱ひろい」（5/10）、野外観察会「筑波山へ行こう～石が語る自然の歴史」（つくば市との共同企画）（5/17）が行われました。また、イベントではありませんが、東大通りに出現した「5月10日は地質の日」の横断幕（写真2）も一般の方にインパクトがあったようです。

一方、「地質の日」に合わせて、地質標本館の化石試料を忠実に再現したチョコレートが、（株）エクスポートから発売されました。地質調査総合センターは、地質情報の普及の観点から、化石の学術的な監修とチョコレートに同梱されている解説書を監修し、大きな役割を果たしまし

た。このチョコレートは、博物館等で地質や化石に関する情報に触れた方が、そのうちくを持って帰ることのできる商品です。ほとんどすべての新聞に「地質の日」とともに取り上げられ、「地質の日」事業では最も大きな話題となるとともに、GSJの大きな宣伝になりました。

この他にも、「地質の日」を記念して、「地図中心」誌（財）日本地図センター）で地質図の特集を公表し、また地質標本館ではグラフィクスシリーズ9として「屋久島の地質」を出版しました。「屋久島の地質」はジオパークを目指す地域がGSJの地質情報を利用して地質の解説をする時のよい実例となることが期待されています。

このように、GSJでは「地質の日」事業について、全国の事業を推進する「事業推進委員会」の主要メンバーとしての活動と、「地質の日」事業を行う一機関としての活動の両者を行っています。「地質の日」の事業は、今年以降長く続いていくものですので、GSJとして地質情報の普及を図るとともに、地質情報のリテールを担う博物館等の機関が元気になること、また地質情報を使って地域が元気になることを目指し、息長く活動していきたいと思えます。



写真2 東大通りの産総研 東事業所側歩道橋に揚げられた横断幕

## CCOP 第51回管理理事会報告

内田 洋平（地圏資源環境研究部門）・鈴木 祐一郎（地質調査情報センター）

タイ王国のチェンライにおいて、第51回CCOP管理理事会が2008年4月2日から4月4日までシンガポールを除く10加盟国の代表、協力国、協力機関、顧問団、ならびにオブザーバーとしてモンゴルおよび東チモールの両国が参加して開催された。日本からは以下の方々が出席した。佃 栄吉（産総研地質担当研究コーディネータ）、嶋崎吉彦（地質調査情報センター参与）、鈴木祐一郎（地質調査情報センター・地質調査企画室・国際連携主幹）、内田洋平（同地質調査企画室・総括主幹）、富田悟幸（主査）。

議事次第は、(1)開会、役員選出、議題採択、(2)CCOP

活動報告（2007年1月～2007年12月）、(3)プロジェクト提案の状況とイニシアティブ、(4)2008年の行動計画と予算、(5)顧問団ブレインストーミング会合からの提案の検討、(6)第45回総会と第52回管理理事会の準備に関する報告、(7)その他の討議、であった。

議題に先立ち、マレーシアのDato' Yunus Abdul Razak 管理理事会議長から開会の辞が述べられ、ホスト国のタイの常駐代表であるDMR所長Mr. Apichai Chvajarnpunによる歓迎の挨拶がおこなわれた。また、タイのMr. Phitaks Ratanajaruraks とベトナムのMr. Pham Tuan Viet

が Rapporteur に選任された。

CCOP 活動報告では、Dr. Hee-Young Chun 事務局長により、本期間中の事務局運営、財務、プロジェクト等の活動、フェローシップ、グラントおよび出版に関する報告が行われた。対象期間中に、産総研と CCOP との契約によって実施された 4 件のプロジェクトについて活動が報告され、GSJ が 2002 年から実施した Metadata プロジェクトが成功裏に 2007 年 3 月に終了したことが報告された。さらに、世界で British Geological Survey(BGS) が主導し、CCOP 内で GSJ が中心的な立場で協力している OneGeology について活動を開始されたことが紹介された。その他、タイ代表から、CCOP 事務局が移転予定のビルが DMR 敷地内に 5 月初旬に完成予定であり、6 月中旬に移転することが期待できるとの発言がなされた。

プロジェクト提案の状況とイニシアティブでは、事務局長から会議で検討すべきプロジェクト提案の状況とイニシアティブについて報告がなされた。次の新規イニシアティブについて了承された。

- ・ CCOP 地域におけるガスハイドレートに関するプロジェクト
- ・ BGR-CCOP による自然災害のマネジメントに関するワークショップ（独・インドネシア共同地質災害プロジェクト成果普及のため）
- ・ タイ湾における海岸浸食・防止処置のアセスメント（ポーランド）
- ・ 地質バリア特性についての実験に関するトレーニングコース（独）

行動計画と予算では、産総研が推進する 4 件のプロジェクトについて報告が行われた。また、中国代表より、各国から希望が提出されたプロジェクトに関し、事前に事務局で整理し、3～5 年後に実現性のあるプロジェクトを優先していただきたいとコメントがなされた。タイ代表からは、2008 年予算では収入が高く設定されており、今後も財務状況には注意を払ってゆく必要があるとのコメントがなされた。

第 45 回総会と第 52 回管理理事会の準備に関する報告については、タイ代表団から、第 45 回年次総会が 11 月 16～21 日に、第 52 回管理理事会が 22～23 日に、コンケンで開催予定と状況が表明された。また、ベトナム政府から、第 46 回年次総会および第 54 回管理理事会の 2009 年 11 月にブンタウ（Vung Tau）での主催を希望すると表明がなされ、各国から歓迎の意が表された。

その他の議題で主なものは以下の通りである。

#### 1) 国際惑星地球年（IYPE）の活動

各国から IYPE に関する活動の進捗状況の報告がなされた。日本からは、国内委員会の活動、各種関連イベントの状況などについて報告をおこなった。

#### 2) 第 33 回万国地質会議（33rd IGC）について

事務局長から IGC での活動案が説明された。

#### 3) セクターマネージャーの雇用契約について

Ms Marivic P. Uzarragano の雇用延長について承認した。ベトナム代表から、任期が 2008 年 11 月までの資源担当セクターマネージャー Dr. Nguyen Hong Minh については、延長を求めない旨の発言がなされた。議長は、資源担当セクターマネージャーについて、後任候補に関する手続きを至急事務局が始めるように勧告した。

#### 4) CCOP 規則改定の進捗状況

事務局長から、Human Development Index(HDI) に基づく各国分担金（cash contribution）改訂案の説明がなされた。複数の国から意見の表明がなされた。議長は各国は速やかに国内関係機関と調整し、結論を得るように努力するようにと意見を集約した。

#### 5) 事務局改編案について

事務局長から改編案の説明がなされた。議長が各国の意見を集約し、事務局は現状にたいする適切な分析を実施し、次回の管理理事会へ再提案をおこなうことを勧告した。

#### 6) CCOP-UAM による津波カンファレンスについて

新協力国ポーランドの提案に対して歓迎の意を表した。

#### 7) 新規加盟国について

加盟国の拡大についての期待を表明した。

#### 8) CCOP—静岡大学との MOU

歓迎の意を表した。

最後に、各国代表から、所見表明があった。日本は、会議を主導した議長、主催国タイ政府および事務局長およびスタッフに謝意を表した。さらに、日本の IYPE や Geopark の活動について述べた。日本が CCOP で推進しているプロジェクトの中で 2008 年中に終了予定の水資源、火山ワークショップ、デルタ域の地質アセスメントの 3 プロジェクトについては、4 年間の延長を計画していることを表明した。最後に、CCOP 副代表で地質調査総合センター（GSJ）代表が、4 月 1 日で佃栄吉から加藤碩一に交代したことを連絡した。

以上をもって、第 51 回管理理事会が終了した。



# CCOP 第 51 回管理理事会巡検に参加して

富田 悟幸 (地質調査情報センター)・内田 洋平 (地圏資源環境研究部門)

CCOP 第 51 回管理理事会が無事終了した翌日、2008 年 4 月 4 日 (金) にチェンライでの巡検があり、参加したので報告する。チェンライはタイの北端に位置する都市で、バンコクから 829km 離れている。13 世紀にランナータイ王国の都として栄えたチェンライは山に囲まれ、数多くの遺跡が残る歴史ある町である。

まず始めに、ドイ・トゥン開発地区 (Doi Tung Development) における地滑り地を見学した。この地域は、2007 年 4 月 1 日に山火事が発生し、急斜面の森林が消失してしまった。タイの気候は、雨期と乾期とに分かれており、降雨量の多い雨期には、地滑りが常に観測されるようになってしまった。地滑り地の周辺には、道路や幼稚園などの公共施設が多いため、タイ鉱物資源局 (DMR) が調査と地滑り防止工事を開始した。現在では、同地における植林や防護壁の施工などが進んでいる。また、DMR は、同地における詳細な地質図や地滑りハザードマップ (図 1) も作成している。

次に向かったのが、ゴールドトラリアングル (黄金の三角地帯) (写真 1) に近い、メイ・ファー・ルアン公園 (Mae Fah Luang Garden) である。かつてこの地域では、麻薬の原料になるケシが大量に栽培されていた。麻薬は一部の人たちに莫大な富をもたらす一方で、農民たちは貧しく、麻薬による健康被害も深刻だった。ちなみにドイ・トゥン

ンとは、プミポン現国王の母君 (皇太后) が指導した国家プロジェクトのことを言う。このプロジェクトは、ケシを栽培しなければ暮らしていけない人々にたいして資金を提供したり、教育を行った。そして、ケシから商品作物への転換を奨励し、ドイ・トゥン一帯で暮らす山岳少数民族をコーヒー農家に生まれ変わらせた。皇太后の出資によって設立されたメイ・ファー・ルアン財団は、現在ではコーヒーの生産管理やタイ国内での販売を行っている。

昼食後、アヘン博物館とタイ・ラオス・ミャンマーの 3 カ国が接するゴールドトラリアングルを見学し、最後に地震の被害を受けた寺院 (Phara That Chom Kitti) を見学した。ここでは、2007 年 5 月 16 日にマグニチュード 6.3 の地震が発生し、この地震は 800km 以上離れたバンコクでも揺れを感じたという。この寺院の仏塔 (写真 2) は、1487 年に修復された物であったが、この地震によって仏塔は傾き、天辺の金具が落ちて (写真 3) しまった。DMR では、活断層の調査・研究にも力を入れており、本地震の解説と共に、タイ全土の活断層マップ (写真 4) の紹介があった。

今回の巡検は、タイ北部地域における地滑りや地震などの防災研究のみならず、人々の暮らしの変化も知ることができ、充実したプログラムであったといえよう。

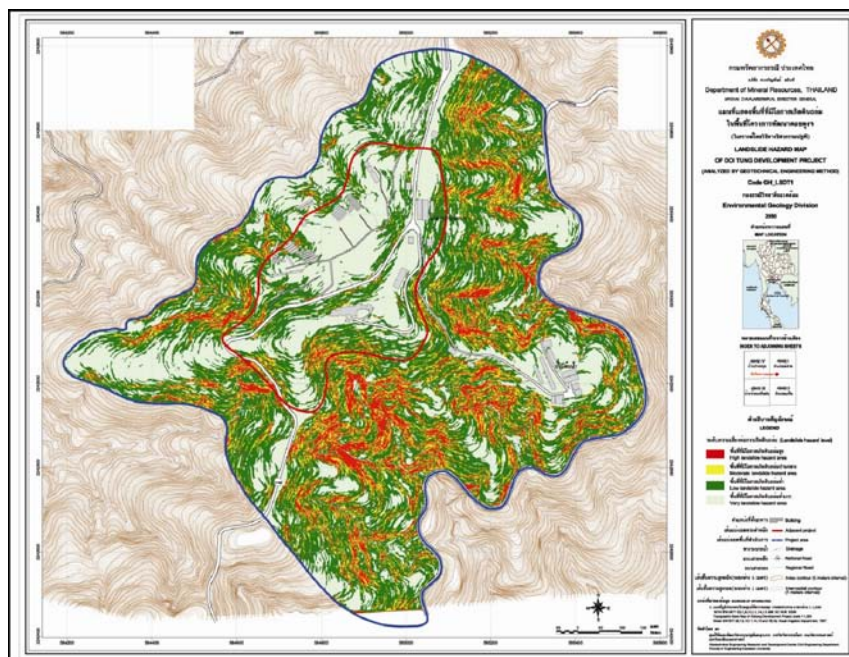


図 1 Doi Tung 開発地区におけるランドスライドハザードマップ (タイ鉱物資源局、2007)

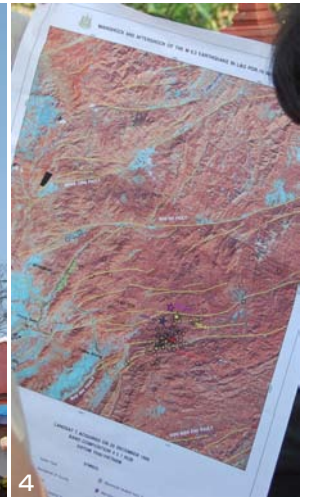


写真1 ゴールドトライアングル(黄金の三角地帯). 昔はこの辺一帯はケ  
ン畑だった. 手前がタイ, 奥の方がミャンマー, 対岸がラオス  
写真2 寺院(Phara That Chom Kitt)の仏塔  
写真3 2007.5.16の地震で落ちてしまった天辺の金具  
写真4 タイ全土の活断層マップ

## 特別講演会「鉱物の楽しみ」の開催

青木 正博(地質標本館)

平成20年度科学技術週間の最終日にあたる4月20日(日)に、産総研つくば中央共用講堂において講演会を開催しました。これは、現在地質標本館ホールで開催中の特別展「青柳鉱物標本の世界」(3月19日～6月29日)との連携イベントとして計画されたものです。おりしも、科学技術週間のイベントとして広報部による「実験ショー」が開催中でもあり、産総研共用講堂は夏の一般公開に次ぐ大盛況となりました。

青柳鉱物標本は、故青柳博士の意志により2006年夏に地質標本館に寄贈されたものです。登録が一段落、図録の編集が一段落し、今回の特別展開催となりました。青柳コレクションは、美しさ、教育的効果において傑出しており、地質標本館を訪れる楽しみが増えたとの声を、多くの来館者からいただいています。

講演会の模様をご報告するに先立ち、青柳隆二さんと、講師の光川 寛さん(写真)の関係について簡単に触れましょう。標本を御寄贈下さった青柳隆二さんは、永年青少年の理科教育に携わり、地学、鉱物、実験の楽しみを多く体験させることを通じて、多くの青少年の心に火をつけた

方です。そして、今から50年前に火をつけられて、今まで鉱物への情熱を持ち続けておられる方が、講師をお引き受け下さった光川 寛さんです。光川さんは大学で地学を専攻したあと、通産省(現経済産業省)に入省され、資源、エネルギー、環境、科学技術などの行政に携わって来られました。地質調査総合センターは、長年にわたって直接間接に光川さんにお力添えをいただいております。地質研究においても地学教育においても、標本の充実と管理体制が基本的に重要であるとの認識をもっておられ、地質標本館の建設、第7事業所の地圏情報棟(C-8)の建設にもかかわられました。現在はNEDO特別顧問の要職についておられます。光川さんご自身も、青柳先生と相携えて鉱物コレクションを続けてこられました。自宅の標本室には、日本産を中心に鉱物標本が1万数千点あり、鉱物に興味を持つ市民の見学を受け入れておられます。青柳鉱物標本を青柳さんのご遺族から地質標本館に御寄贈いただくにあたって、牽引役を担っていただきました。また、このたびは、きわめてご多忙にもかかわらず、講師役を喜んでお引き受けいただきました。すべて、鉱物標本と地学教育への



情熱ゆえと思います。

標本と地学教育に対する、青柳さんと光川さんの情熱は、青少年や市民と日常的に接点を持つ地質標本館には強力な援軍となりました。展示をより魅力的にするよう、地質標本館は引き続き努力して参ります。

さて、本題の普及講演会にもどりましょう。

光川さんは、「鉱物の楽しみ」と題する講演の前半では、望ましい理科教育の方法、鉱物と人間の成長の関係、鉱物と産業の関係などの本質的な問題について、ご自身の体験に基づいてわかりやすく語られました。後半には、ご自身が実践している鉱物のユニークなディスプレイを多数紹介されました。結晶を絵画的に組み合わせる額縁に入れる、玄関の上がり口に石材をはめこむ、庭石として植物とのコラボレーションをはかるなど、鉱物の楽しみ方がいかに多様でありうるかを示されました。その語り口から「鉱物は本当に楽しい」ことが伝わりました。講演終了後には、講師の光川さんと参加者とのコミュニケーションの時間が用意されました。司会者としては、質問というよりはむしろ個人的な会話に近い感覚での発言を促しましたところ、大人3人、小学生5人から発言がありました。光川さんは、科学好き高齢者のやや抽象的な議論には、会場に来ておられた石原顧問も巻き込んで巧みに回答する一方、小学生のほほえましい質問にも、言葉を選び最大限わかりやすく答

えていただきました。大講堂での講演会で、小学生から活発な発言があることは希です。座席が階段状になっており、どの席からも講師の姿を見通せる、体の小さい小学生

でも楽に講師と目線が合うといった、会場の物理的条件が有利に働いた可能性があります。会場の構造もさることながら、それ以上に講師の気さくなお人柄と優しい語り口が、小学生にも発言の勇気を与えたように、私には思われました。

企画段階では、会場を地質標本館の映像室（定員55名）にする予定でしたが、お客様が多くなりそうだとということがわかり、急遽共用大講堂（定員500名）に会場を変更した経緯があります。当日は200名を遙かに超える参加者がありましたので、会場選びも正解でした。参加者の大部分は首都圏在住の方ですが、ニューヨークや九州からの参加者もありました。



写真 鉱物の楽しみを熱く語る光川 寛さん

## 地質調査総合センター第12回シンポジウム「地下水と岩石物性との関連の解明～産総研のチャレンジ～」報告

高橋 学（地圏資源環境研究部門）

2008年5月8日13時～17時半過ぎまで秋葉原ダイビルにて地質調査総合センター第12回シンポジウムが約140名の参加を得て行われました。

産総研では、多様なバックグラウンドを有する研究者が地下のさまざまな地質現象を理解し予測するために、異なる視点や手法に基づいて地下と同じ環境を再現しながら、実験室内の小さな空間で再現する計測手法も採用し、地下水と岩石物性との関連の解明に取り組んでいます。今回は、前回のGSJシンポジウム「地下水のさらなる理解に向けて」を受ける形で、室内実験を中心とした研究紹介を前面に押し出しての内容で、産総研における多岐にわたる研究実施例を紹介し、岩盤工学・水理学・地震学などの立場から進められている実験室内から自然現象を理解する試みについて紹介しました。

開催に当たり、加藤碩一地質調査総合センター代表か

ら地質調査所時代の岩石実験における黎明期の話が紹介されました。日本初の岩石用三軸試験装置は半地下のタイル張りの実験室に設置されていたという、当時を偲ぶ形での紹介は印象的でした。三軸試験を含めた岩石物性試験の重要性が地質調査関連事業や研究には欠かせないという認識のもと、今後の発展を期待するエールとして受け取りました。続いて高橋（地質特性チーム主任研究員）が、日本初の三軸試験装置を用いた報告書、産総研報告No.244[Mechanical Properties of Japanese Tertiary Sedimentary Rocks under High Confining Pressures]の内容についての紹介と、約40年後もこの流れを汲んで基礎的な研究が継続されていること、そして各分野における成果を紹介し、研究内容への理解と有効活用の希望を述べました。

徳永朋祥<sup>ともちか</sup>東京大学准教授による「難透水性地層中の地下

水流れ・物質移行の定量評価に向けて」と題した基調講演では、従来、複雑とされてきた帯水層の変形と間隙水圧変動を簡単な物理モデルで再現する具体例等が紹介されました。この後、ポスター発表6件をはさみ、6件の一般講演が行われました。

総合討論では、地表と地下深部における亀裂開口幅の差異の問題、流体の化学的性質を示す流れ場の表現方法および流れ場としての痕跡を示す表現方法などの未知の課題に関する提案、研究に軸足をおきながらも民間を意識したサイレントな貢献と情報交換、社会に活用される研究内容の提示と研究成果の還元、社会のニーズに対応できる距離感

のとり方と積極的な情報交換など、大変重要な課題や貴重な御意見をいただき（写真）、シンポジウムを終えました。



写真 産総研と社会とのより密接な関係を築くべきとのエールをいただいた深田地質研究所・田中荘一さん

## 平成 20 年度文部科学大臣表彰 創意工夫功労者賞を受賞 - 火山体の地殻変動観測システムに係る改良 -

### 地質調査情報センター

地質調査情報センター地質情報統合化推進室の齋藤英二氏は、「火山体の地殻変動観測システムに係る改良」の業績により「平成 20 年度文部科学大臣表彰 創意工夫功労者賞」を受賞しました。当センターとしては、一昨年度の「地質文献データベース」での菅原義明氏、昨年度の「地質図の編集・印刷及び地質図情報提供」での中島和敏氏、川畑晶氏に引き続き 3 年連続の受賞です。

地質調査総合センターでは、火山災害の軽減を目的として様々な火山活動の監視観測を実施しており、火山体の地殻変動観測はそのうちの一つです。地下のマグマの動きに伴って、火山体はわずかずつ変動します。そのような地殻変動を高精度・高時間分解能で明らかにすることは、火山活動状況の理解による危険の予測と、地質現象のモデル化による将来予測を実現するための大変重要な情報です。齋藤氏は、光の反射を使って地点間の距離を測定する光波測距や、人工衛星を使って位置を検出する GPS を用いて、火山活動に伴う地殻変動の監視観測を行ってきました。その中で、観測・解析手法や、観測点配置、観測機器システムの構築に様々な改良を行って、微小な地殻変動の迅速かつ高精度の検出を実現してきました。

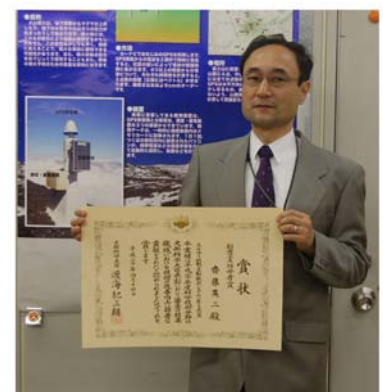
1991 年雲仙普賢岳噴火の際には、光波測距測線の位置・方向を検討して、火山体の変動量と方向を正確に計測するのに最適な観測体制を構築し、溶岩ドーム噴出の直前現象の検知に成功しました。また、自動観測システムを開発・導入して、日々変化する普賢岳溶岩ドームの成長過程を捉えることができました。

また、高精度の GPS 地殻変動観測を実現するための簡

便な気象補正手法を開発しました。2006 年には、この手法に基づく解析により、口永良部島火山において熱水活動の活発化に伴うと考えられる微小な地殻変動の検出に成功しました。この結果は同年 10 月末の気象庁の火山観測情報発令にも生かされ、自治体等の関係部署の活動、島民の安全確保と防災意識向上のきっかけとなりました。

さらに、従来は困難であった厳冬季での火山体の地殻変動連続観測にも取り組み、観測点設備の設計や観測機器の損傷軽減、データ転送システムを工夫することで、連続観測システムを構築することに成功しました。このシステムは、標高が高く観測条件が厳しい富士山において、数年間にわたり安定に稼働しています。

これらの観測手法の開発・改良が火山噴火予知の基礎的研究に大きく貢献したことが認められ、今回の創意工夫功労者賞受賞に至ったものです。齋藤氏の今後の更なる活躍が期待されます。



文部科学大臣表彰：創意工夫功労者賞を受賞した齋藤英二氏。左下は、授与されたメダルで、科学技術の象徴としての「人類と火の関わり」をデザインしたという。

## 新人紹介

### 山崎 徹(やまさき とおる, 地質情報研究部門)

2008年4月1日付で地質情報研究部門・島弧複合地質研究グループに人材育成型任期付研究員として採用されました, 山崎 徹です。

これまで私は, 北海道日高変成帯の深成岩類の研究(山口大学卒・修士課程), オマーンオフィオライトの深成-火山岩類の研究(北海道大学博士課程)そして現在の海洋底の深成岩類の研究(北海道大学ポスドク)等を行ってきました。これらの研究では, 野外調査に基づいた産状観察を基本として, 深部地殻内でのマグマプロセスの実態についての地質学的・岩石学的・地球化学的検討をおこなってきました。

研究成果を挙げるためには, 高い専門性を磨くことはもちろんですが, 特に野外での産状を理解するにあたって, 広範な地質分野の知識や経験を積むことを心がけており, これまでも異なる専門分野の国内外の研究者との共同研究を積極的に行ってきました。今後は5万分の1地質図幅「足助」(愛知県)の調査・研究を通じて, 領家帯における島弧地殻形成プロセスの研究を行っていく予定です。どうぞよろしくお願いたします。



## スケジュール

3月18日~6月29日	地質標本館特別展 青柳鉱物標本の世界(地質標本館) (つくば市, <a href="http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2008/aoyagi/aoyagi.html">http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2008/aoyagi/aoyagi.html</a> )
6月8日	日本地質学会関東支部総会および第2回研究発表会「関東地方の地質」(早稲田大学) <a href="http://www.geosociety.jp/news/n32.html">http://www.geosociety.jp/news/n32.html</a>
6月10~13日	石油技術協会総会・春季講演会(新潟) <a href="http://www.japt.org/">http://www.japt.org/</a>
6月16~20日	Asian Oceania Geoscience Society(AOGS)2008(釜山) <a href="http://www.asiaoceania.org/aogs2008/">http://www.asiaoceania.org/aogs2008/</a>
6月24~26日	資源地質学会2008年度年会学術講演会(東京大学) <a href="http://www.kt.rim.or.jp/~srg/page_event.html">http://www.kt.rim.or.jp/~srg/page_event.html</a>
8月6~14日	33rd International Geological Congress(IGC) Oslo 2008(オスロ) <a href="http://www.33igc.org/coco/">http://www.33igc.org/coco/</a>
9月19~21日	地質情報展2008あきた(秋田市民プラザ ALVE きらめき広場)(地質調査総合センター, 他)

## 編集後記

### 齋藤英二(地質調査情報センター)

最近, タイムシェアリングだなあ, と思うことが多くなりましたが, 狭くなってきた隙間でどうにか発刊に漕ぎ着けました。もっともその比でない多忙重責な皆様に原稿をお願いしているので恐縮いたします。

さて, 「地質の日」関連で話題沸騰の「化石チョコレート」(<http://www.geobox.jp/>)ですが, 形の精巧さはいまでもありません。問題?は, チョコ独特の滑らかな光沢が加わって, 生き生きとした表情になった三葉虫でしょうか。形で味が変わるような, 得もいえぬ体験ができました。

最後に, アジアで大災害が起きてしまいました。被災された皆様にお見舞いを申し上げ, 一刻も早い回復を願って後記とします。

## GSJ Newsletter No.44 2008/5

発行日: 2008年5月23日  
発行: 独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター  
編集: 独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査情報センター  
脇田 浩二(編集長)  
齋藤 英二(編集担当)  
伊藤 伸子(デザイン・レイアウト)

〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7  
TEL:029-861-3687 / FAX:029-861-3672

GSJ ニュースレターは, バックナンバーも含めて, 地質調査総合センターホームページでご覧になれます。

■地質調査総合センターホームページ: <http://www.gsj.jp/>  
■GSJ Newsletter のページ: <http://www.gsj.jp/gsjnl/index.html>